

(別記様式)

令和7年度 府立聾学校舞鶴分校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針(中期経営目標)	今年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p><学校目標> 夢・可能性・生きぬく力</p> <p><教育目標> 人と向き合い、社会とつながりながら自ら考え、伝え、行動する幼児及び児童生徒の育成</p> <p>(1)夢と希望を持ち、自ら学び自らを高め、自らの未来を見通し切り拓く力を育む。</p> <p>(2)高い志とユニバーサルな視野をもって、自らの能力や可能性を最大限に伸ばし、自分らしくこれからの社会づくりに貢献できる人間を育成する。</p> <p>(3)目標を実現するため、失敗を恐れず挑戦し、やり抜く意志と健康でたくましく生きる力を育む。</p> <p>(4)礼儀と規律を重んじ、人を思いやり共に助け合い、人や社会と積極的に関わりながら共生する力を身につけ、次代を支える人間を育成する。</p> <p>(5)自然や文化を学び、愛し、大切にすることを育てる。</p>	<p>【成果】</p> <p>(1)全校研究では、授業や生活場面での数量形に関わる幼児児童の気づきや言動を踏まえ、思考を促す関わりについて検討したことを指導場面で生かすことで、個々の実践力が高まった。</p> <p>(2)文部科学省委託事業「インクルーシブな学校運営モデル事業」(2年目)において、教科学習を中心とした新たな交流校との共同学習をはじめ、継続可能な交流の在り方を見通すことができた。</p> <p>(3)食育や保健、安全に関わる指導において、お便りや掲示物、生活調べや給食試食会等によって家庭と連携をとることで、保護者の意識を高めることができた。</p> <p>(4)熱中症や感染症に対しては、高い意識を保つためのお互いの情報発信や状況に応じた対策によって、教育活動への支障を最低限に抑えることができた。</p> <p>(5)これまで取り組んできた舞鶴分校の集いや担当者連絡会などの内容を見直すことで、より保護者や地域のニーズに応える行事や取組になり、地域とのつながりを強めることができた。</p> <p>【課題】</p> <p>(1)ICTの活用では、学校DX研修等の外部研修での成果の校内への還元や、個々の実践事例の交流には取り組めなかった。</p> <p>(2)教職員の手話力の向上については、どうしても個人任せになってしまった。1年をとおした具体的な目標や取組が必要だった。</p> <p>(3)体づくりの取組では、屋内での遊びや活動が中心となってしまった。集中的に取り組む期間を設けるという点でも課題が残った。</p> <p>(4)常時勤務する教員の減少もあって、校務分掌会議の個々への負担が大きくなってきている。</p> <p>(5)年度途中の年間計画の見直しをはじめ、全校で地域支援を行っていくための周知・確認や呼びかけが不十分になりがちだった。</p>	<p>1 豊かな学びの創造と確かな学力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人一人の障害や発達に応じた言語力・学力の育成 聴覚障害の特性や少人数の課題を踏まえ、授業のねらいや主体的な学びにつながるICTの利活用とICT教育の推進 年間をとおした読書活動や保健・食育・安全に関わる日常的な言語習得の取組による幅広い言語力の育成 <p>2 豊かな人間性の育成と多様性の尊重</p> <ul style="list-style-type: none"> 「通じ合う」「分かり合う」「認め合う」ためのコミュニケーション能力の育成 多様な集団での経験を広げ、子ども同士で言葉のやりとりをする力の育成 自立活動の学習や交流及び共同学習、人権の取組による自他を理解する力の育成 <p>3 健やかな身体の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動遊びや体育、体育的行事や日常的な遊びの充実による基礎体力の向上 自立と社会参加の基盤となるソーシャルスキル(主に健康・生活)の育成 体づくりや生活習慣の確立に向けた家庭との連携 <p>4 学びを支える教育環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内における感染症拡大防止や熱中症対策の徹底と家庭との連携による教育活動の継続 手話や教育オーディオロジーの研修による教職員の専門性の継承と人材育成の推進 教職員が健康で生き生きと働ける職場作りと働き方改革の推進 <p>5 学校・家庭・地域の連携・協働と社会教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者(PTA)や学校運営協議会、福祉機関等の関係機関との連携による教育活動の充実 府北部の聴覚障害児や保護者、地域のニーズに応える相談活動の充実とネットワークの強化 舞鶴分校の強みや魅力、教育の成果や専門性の幅広い発信

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
<p>1 豊かな学びの創造と確かな学力の育成</p>	<p>一人一人の障害や発達に応じた言語力・学力の育成</p>	<p>研究テーマを全教職員で確認して計画的に全校研究会をもち、研究活動と日々の教育実践を結び付けることで数・量・形の概念形成を促し、算数的思考力を高める。</p> <p>授業研究会によってPDCAサイクルによる授業改善に取り組んだり事後研究会の成果をまとめたりすることで一人一人の授業力を高める。</p> <p>自立活動の指導を通して幼児児童の言語力の実態や課題をアセスメントし、担当と担任との連携によって幼児児童の言語力や学力を高める。</p>	<p>A</p> <p>B</p> <p>B</p>	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 数量形に関わる幼・小の子どもの学びの様子や発言を持ち寄り、交流し合うことで、実態を深く理解し、思考を促す言葉かけなど、幅広い指導に生かすことができた。 居住地校や聾本校との交流では、事前学習にオンラインを活用することで対面交流をスムーズに取り組むことができた。 毎日の読み聞かせ(幼)や毎日読書タイム(小)によって、

	<p>授業のねらいや主体的な学びにつながるICTの利活用とICT教育の推進</p> <p>年間をととした読書活動や保健・食育などにおける日常的な言語習得の取組による幅広い言語力の育成</p>	<p>聴覚障害の特性や少人数の課題を踏まえたICT活用の目標や課題を設定し、授業のねらいや幼児児童一人一人の学びに応じた活用に取り組む。</p> <p>交流校や居住地校、本校との交流において、オンラインを活用した伝え合いや学び合いの機会を積極的に作ることで交流及び共同学習を充実させる。</p> <p>授業でのよりよいICT機器の活用を進めるために、スキルアップのための研修に取り組む、成果を共有する。(校内研修、学校DX研修 他)</p> <p>年間をととして幼児児童の実態に応じた読書活動を工夫し、一人一人の本に触れる機会や読書量を増やすことで「本好きの子ども」を育てる。</p> <p>幅広いジャンルの本に触れたり、一人一人の読書量を増やしたりすることで、読書好きの子どもを育てる。(読書週間、長期休業、読書タイムの活用)</p> <p>会話を楽しむ気持ちや「もっと話したい」「もっと知りたい」という意欲を育てるために、毎日の挨拶や日常的な会話の中で常に「複数回の言葉のやりとり」を意識して関わる。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>A</p> <p>B</p> <p>A</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>A</p>	<p>幼児児童の読書への意識が高まった。読書週間の読書ビンゴの取組は効果的だった。</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究活動をはじめ、子どもの実態や課題、学校として取り組むべきことなどの情報が、学部外の教職員に十分共有されないことがあった。 ・ICTの活用については、エバンジェリストや学校DX研修の成果が学校として生かすきれなかった。 ・言葉を丁寧に押されるなどの指導は意識して取り組めたが、子ども同士のコミュニケーションの機会を意識的に作るという点では課題が残った。(幼) ・家庭でも読書の習慣をつけるための家庭との連携が課題である。 ・複数回のやりとりを意識したが、言葉が続かないことがあったので、語彙力とともに意欲を高める。
<p>2 豊かな人間性の育成と多様性の尊重</p>	<p>「通じ合う」「分かり合う」「認め合う」ためのコミュニケーション能力の育成</p> <p>多様な集団における主体的・対話的な学びの創造</p> <p>自立活動の学習や交流及び共同学習、人権の取組などをとおしての自他を理解する力の育成</p>	<p>児童集会・集団遊び・ペア活動での伝え合いを通して、幼児児童が自分で考えて言葉で伝えることで、子ども同士が通じ合う関係を築く。</p> <p>体験的な学びを充実させ、事後の感想発表や日記・作文などをとおして感じたことや思ったことを他者と共有・共感できるようにする。</p> <p>教職員は、聾学校の基礎的環境整備のとして、子どもがいる場面では手話や指文字を用いる。</p> <p>行事や児童会遊びなどにおいて子ども同士が関わったり話し合ったりする機会を作り、言葉のやりとりや関わりの様子を記録することで、子どもたちの心の動きや成長を確認する。</p> <p>「インクル事業」(2年目)にあたり、交流校や居住地校との交流の回数や内容、取り組み方を工夫し、子ども同士が関わったり学んだりする場面や機会を増やすことで、幼児児童が自主的・主体的に考えたり行動したりする力をつける。</p> <p>行事や取組において個々の目標をもち、自分たちの力で計画・実施・振り返りをする活動を増やすことで、見通しをもって自主的に取り組む力を高める。</p> <p>自立活動での学習内容や子ども自身が考えたことを交流及び共同学習で発表し、話し合いや学び合いをとおして自己や他者を理解する力を高める。</p> <p>人権週間や「いじめアンケート」、「いいところ見つけ」等の人権の取組を通して、お互いの個性や価値観の違いを認め、自他を大切にすることを育む。</p> <p>卒業生や成人聴覚障害者と関わったり話を聞いたりする機会を作り、自身の障害や進路、将来の社会での生活などについて考えたり話し合ったりすることで、将来の目標や将来への見通しをもつ。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>A</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>A</p> <p>B</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いいところ見つけ」や「いいこといっぱい大作戦」などの取組をとおして、幼児児童が「いいところ(こと)」に目が向けられるようになってきた。 ・いじめ緊急アンケートの際に、CSと連携していじめについて児童が学ぶ機会を作ることで、児童のいじめに対する意識が高まった。 ・手話研修や人権研修、PTA人権研修会において、成人聴覚障害者から学ぶ機会を持つことで、教職員の聴覚障害や人権に対する理解が深まった。 ・幼児児童は、たくさんの行事をとおして言葉を習得し、経験を広げ、考える力がついてきている。 ・3年生は、自らが目標を設定して取り組むこと、司会や挨拶の役割を果たすことをとおして、最高学年としての力を発揮できた。 ・行事の個人目標の掲示によって教職員や保護者が共有できた。目標を踏まえた関わりを意識する。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の手話力を高めるために、手話研修と日々の意識的な活用を組み合わせて取り組む。 ・行事等における子どもの言葉のやりとりや関わりの様子を記録に残すことができなかった。 ・成人聴覚障害者をはじめ、外部から講師を招く場合の予算の確保が課題である。
<p>3 健やかな身体力の育成</p>	<p>体育や体育的行事、遊びの充実による基礎体力の向上</p> <p>自立と社会参</p>	<p>体育的行事や取組における体力向上のねらいを明確にし、系統的かつ継続的に取り組むことで幼児児童の基礎体力の向上に取り組む。</p> <p>外遊びや屋外での活動を意識的に取り入れ、思い切り体を動かすことやダイナミックな遊びなどに取り組むことで体力を向上させる。</p> <p>学校保健計画に基づいた指導に取り組み、健康に過ごすための基礎的な知識や行動など、ソーシャルスキルの基盤となる力を身につけさせる。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚部では、年間をととして朝の時間帯に体操やリトミックを取り入れることで、スムーズに気持ちを切り替え、次の活動に入ることができた。 ・幼児児童が興味をもって学べるよう、保健指導や食育指導に関わる掲示や体験などを工夫することができた。

	加の基盤となるソーシャルスキル（主に健康・生活）の育成	食に関する指導の全体計画に基づき、日々の給食や給食週間をはじめとした食育の取組や家庭との連携をとおして食に対する意識を高め、将来にわたって健康に過ごす体を作る。	A	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・食育だよりをとおして、家庭と連携しながら、よりよい食習慣の形成に取り組むことができた。 ・「安全の日」の継続的な指導によって、幼児児童が自主的に判断したり行動したりする力が身についてきている。 【課題】 <ul style="list-style-type: none"> ・暑さや寒さの影響もあって、外遊びがあまりできなかった。 ・意図的・集中的に体力づくり（縄跳びなど）に取り組む必要があった。 ・学部外の教職員が授業を担当する時は、学部時間を活用するなどして、事前の準備や打ち合わせの時間を十分に確保する必要があった。 	
	体づくりや生活習慣の確立に向けた家庭との連携	日々の連携や連絡ノートなどをとおして家庭での生活習慣や生活実態を把握し、食事や睡眠など、規則正しい生活が送れるように指導する。 幼児児童のよりよい生活習慣の確立に向けて、長期休み明けに生活調べを行い、結果を踏まえて家庭への報告や啓発を行う。 たよりや掲示物などを活用して、健康管理や基本的な生活習慣の確立に向けての情報を積極的に発信する。	A	A	A		
			A	A	A		
4 学びを支える環境の整備	感染症や熱中症への対策の徹底による教育活動の継続	感染症や熱中症の状況を踏まえ、感染症や熱中症への対策を徹底することで幼児児童の健康を守り、教育活動を継続させる。 感染症や熱中症への対策をすすめるために、家庭との連携を十分にもつ。（風邪症状がある場合の対応、帽子や水筒の持参など）	B	A	A	【成果】 <ul style="list-style-type: none"> ・職員間で感染症が広がった際には、感染後の対応を適切・迅速に行うことで、感染を最小限にとどめることができた。 ・学部研修の時間に、時期に応じた手話の確認をすることができた。 ・職場内に、ざっくばらんに話し合える雰囲気を感じられる。少しの思い付きも気兼ねせずに提案できるようにしていきたい。 【課題】 <ul style="list-style-type: none"> ・個人の教育観が強いと、結果的に他の教師の考えが反映されにくくなり、様々な角度からの検討をしにくくなってしまう。 ・行事や取組を増やすのは簡単だが、減らしていくことは慎重にならざるをえない。断捨離できることがあれば、「試しにやってみる」という感覚で取り組んでいきたい。 	
	手話や教育オーディオロジ等の研修による教職員の専門性の向上・継承と人材育成の推進	年間を通じて手話研修や専門研修に取り組むことで、個々の教職員の力量や聾学校としての専門性を高める。 聴覚管理や教育相談、自立活動や通級指導に係る専門性の継承と向上のために、校内での研修やケース検討、対外的な研修の報告会の開催や研修資料の作成に取り組む。 日頃の実践や子どもとの関わり、指導方法などについて話し合える機会を作り、人材育成や職場全体の専門的力量的向上につなげる。	B	A	A		
	教職員が健康で生き生きと働ける職場づくりの推進	お互いに敬意を払い、尊重する意識をもって接すること、丁寧なコミュニケーションに心がけることで風通しの良い職場づくりをする。 働き方改革の視点に立って、それぞれの部署や職種における業務、分掌組織や取組のさらなる検討や見直しを行うことで、健康で働ける職場をつくる。 メンタルヘルスの研修や職場の健康づくり事業の実施や職場改善アンケートに基づく改善や見直しによって、健康で働きやすい職場づくりに取り組む。	B	B	B		
				B	B		B
5 学校・家庭・地域の連携・協働と社会教育の推進	PTA や学校運営協議会、福祉機関等の関係機関との連携による教育活動の充実	参観日の感想や教育アンケート、日常の連絡・連携をとおして保護者の分校教育への評価や要望を集約し、具体的な改善につなげる。 参観日を利用して、保護者が学んだり交流を深めたりする機会を作り、保護者の子育てや家庭の教育力向上を支援する。 学校運営協議会における熟議や委員からの助言を踏まえて学校経営計画の改善を図るとともに、関係機関との協働によって教育活動をさらに充実させる。	A	A	A	【成果】 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者セミナーや保護者交流会を定期的に設定し、保護者のニーズや疑問を拾いながら内容を深めることができた。 ・これまでの参加状況や課題に基づき、必要に応じて事業の見直しを行うことで、より地域のニーズに応える事業として取り組むことができた。 ながら公開講座や担当者連絡会を実施 <ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害や合理的配慮以外にも、進路や受験時の配慮申請などの情報も提供することができた。 ・教職員研修会では、事後のアンケート結果を踏まえて内容を見直し、よりニーズに応じた研修へと高めていった。 ・年3回の地域支援センター報告会をとおして、センターの役割や取組の内容、成果等について学校全体で共通理解を図る 	
	聴覚障害児や保護者、地域のニーズに応える教育相談活動や支援の取組の充実と	聾学校幼稚部への入学や就学、小学部卒業後の進路選択にあたって、面談や交流会、見学等での幅広い情報提供に努めながら保護者の進路選択を支援する。 「舞鶴分校の集い」や地域別保護者懇談会を開催し、つながりや学び合いをとおして子どもや保護者の自己や他者への理解を深め、地域におけるネットワークを築く。 地域支援の行事や取組の実施や通学支援事業、卒業生への相談支援などにおける	A	A	A		
				A	A		A
				A	A		A

	ネットワークの強化	北部聴覚言語障害センターとの連携・協働によって府北部に在住する聴覚障害児の就修学を充実させる。	A	A	<p>ことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホームページは昨年度よりも更新回数が増え、内容も充実させることができた。（特に「子どもたちの活動」） <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・難聴学級の開設が相次ぐ中、難聴学級への支援については、担当の先生方のニーズを踏まえ、年間をとおして計画的に取り組んでいく必要がある。 ・「舞鶴分校の集い」は卒業生と関われるよい機会なので、地域支援センター以外の教職員も積極的に参加するようにする。
	舞鶴分校の強みや魅力、教育の成果や専門性の幅広い発信	ホームページの更新回数を増やすとともに、幼児児童の活動の様子や聴覚障害に係る専門性など、幅広い内容を発信することで閲覧回数を増やし、府北部での存在意義を高める。	A		
		学校だよりやリーフレット、ポスターによって、地域支援センターの教育相談や事業、聾学校の専門性に関わる幅広い情報を発信する。	B		
		学校公開や担当者連絡会、公開講座やスキルアップ講座などを開催し、参加者のニーズや地域の課題に基づいた内容にすることで地域の支援力を高める。	A		

学校関係者 評価委員会 による評価	<p>○授業参観では、少人数ながらも幼児児童が積極的に授業に参加している姿や、先生方の丁寧な言葉かけが印象的だった。</p> <p>○小学部では、柔軟な教育課程によって生み出された時間を読書活動に充てられたのは高く評価できる。特に、絵本の読み聞かせは、地域園でも積極的に取り入れているが、保護者はスマホやタブレットに依存する傾向にあるため、保護者との連携も重要である。</p> <p>○聾学校の先生方に小学校の授業を参観し、事後研究会にも参加してもらう機会を作ることができた。小学校においても言語力に課題のある児童が在籍するため、聾学校の先生からの発言から、視覚的な教材も用いながら言葉で理解することの重要性について学ぶことができた。今後も、お互いの専門性について学び合う機会を作りたい。</p> <p>○インクルーシブ教育をどのように広げていくかが重要となるため、「インクルーシブな学校運営モデル事業」の取組の成果や手法を舞鶴市や京都府下に積極的に発信してほしい。</p> <p>○手話力の向上においては、単に手話単語の暗記にとどまらず、顔つきや目線なども含めた「どう通じるか」という視点が重要であり、そのことは聴覚障害児のみならず、他の障害や学習困難など、特別なニーズのある児童に対しても有効である。音環境の整備や視覚情報の活用においても同様であり、聾学校の専門性は通常学級における学習においても有効である。</p> <p>○地域支援において、地域のニーズに応じた事業や取組を進めていく上で、聴覚言語障害センターとしても地域の子どもとして連携しながら支援にあたっていきたい。</p>
-------------------------	---

次年度に 向けた改善の 方向性	<p>○ICTの活用では、オンライン交流や授業・行事での活用など、校内での活用事例を共有し、学校としての活用力を高めることで、児童の主体的な学習を支援する。</p> <p>○「インクルーシブな学校運営モデル事業」（3年目）の交流及び共同学習の成果や手法を、職員研修会や学校だより、ホームページ等で積極的に発信する。</p> <p>○屋外での遊びや活動に意識的・継続的に取り組むとともに、体力作りに集中的に取り組む期間を設けることで、基礎体力を向上させる。</p> <p>○教職員の手話力を向上させるため、外部講師による研修の機会を作るとともに、日々の授業や行事等で使う言葉の手話表現を継続的に学べる機会を作る。</p> <p>○教員数の減少や校務の多様化に伴う校務分掌の負担を軽減し、授業準備の時間を確保するため、更なる校務分掌の見直しや効率的な会議運営に取り組む。</p> <p>○早期発見・早期支援や難聴学級への支援など、地域のニーズの把握に努めながら、これまでの支援の仕方や行事などを見直し、伴走型の継続支援ができるよう、可能な限りシステム化する。</p>
-----------------------	---